

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 1 日現在

機関番号：13801

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23530997

研究課題名(和文) 越境社会における教科「対話」の創設を目的とした課程モデルの構築と実証

研究課題名(英文) Development of Curriculum Models of "Dialogue" in the Era of Transnational Society and Its Practical Applications

研究代表者

宇都宮 裕章 (Utsunomiya, Hiroaki)

静岡大学・教育学部・教授

研究者番号：30276191

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：要旨

全国の学校において火急の対応が求められている、子どもたち同士の交流活性化を目標に、異なる言語・文化・価値観を背景とする児童生徒が共存する場面(多言語環境)への参画・調査・支援を通して、やりとりの様相を抽出・解析し、対話と学びの関係性・対話的手法の有効性・対話による環境づくりの理論を実証した。この実証過程を経て、現場自らの力による学習環境づくりを支える主体的カリキュラムを構築し、相互交流と環境良質化の手法を学ぶ教科「対話」の創設を行った。

研究成果の概要(英文)：Abstract

The present study was aimed at investigating the relationships between dialogical activities and learning in general, the validity of a teaching method using dialogical actions, and the theory of the construction of a learning situation according to the concept of "Dialogue." The reason of developing these themes were that we should improve the situation in that we could see communication among the students had stagnated in all over the domestic schools. Taking part in the multi-lingual environment where students from different lingual, cultural, and conceptual backgrounds co-exist, I analyzed aspects of the interaction among the students in their classrooms and substantiated how to construct the appropriate learning environment. As a result, the curriculum of the subject titled "Dialogue," which students could learn the wisdom of improving their learning environment, was newly founded.

研究分野：教育言語学

キーワード：言語教育 生態学 対話 多言語環境 教育言語学 主流語教育 国際情報交換

1. 研究開始当初の背景

ことばと教育に関しては、当時からすでに学習活動の成立を考慮する以前の事象が社会問題化していた。たとえば、鋭い感情語を多用する、ことばに不自由を覚える相手に配慮しない、耳を傾けずに自己主張を繰り返す、といった子どもたちの実態である。

こうした問題の解消を射程に入れ、本研究員は公立学校等での調査を基軸としてことばの力の形成と教科等の学習の伸長を図る研究に従事してきた。発達の促進剤としてのことば、学習への貢献財としての人的資源、未知の学習項目・言語文化・社会構成員への接近を促す者としての仲介者の重要性の解明、およびカリキュラム・テキスト等の構築や作成がその成果として蓄積されていた。

しかしながら、理論を実践化する壁は当初からも高かった。国語科においては個人間の交流にかけられる時間が十分捻出できず、外国語活動においては風習・習慣等への理解の前提となるべき事柄の議論ができず、道徳科では経験的なスキルや行為そのものが焦点化されにくい。ここに、「教科横断的なことばの科目」を創設する必然性が生まれた。

折しも、日本社会全体に目を移すと、越境する人々の大規模な移動が発端となり、多様な言語・文化的価値観が混在する様相が全国各地で際立つようになってきた。この潮流の中で、日本語の指導を必要とする児童生徒に関する教育研究の進展もあったのであるが、その成果の大半は外国人等に限定した日本語習得に資する研究や実践に留まり、大局的な教育への還元が置き去りにされていた。

そうした時代の中で求められたもの、特に教育の現場で重要視されてきたのが、異なった価値観をもつ人々を貴重な人材とみなし、彼らを積極的に活かした上で、学びという営為に寄与する研究であった。すなわち、コミュニケーションを学ぶには異なりの存在が欠かせないという認識に基づく教育の重要性である。その鍵概念が本研究での「対話」である。

2. 研究の目的

一般的に「対話」とは、ことばが通じないと目される相手とは最も不可能な行為とみなされがちであるが、本研究ではこの発想を逆転させ、対話を行うところから相互理解を促進する方策を提案する。多言語環境化している昨今の学校状況を千載一遇の好機と捉え、当該環境においても学びを促進することができることを実証し、ことばの壁を乗り越える「ことばの力」を明らかにする。

対話はいつでもどこでも誰とでも可能な行為であるにもかかわらず、互いの了解調整という高度な技法を内在しているため、高い達成感が得られる行為でもある。よって、眼前する人的・物的・思想的素材を対話に乗せて十二分に活用できれば、児童生徒の自己肯定感の醸成にも結びつき、上述した「ことば

の応酬」とも取れる関係崩壊の改善にもつながる。こうした捉え方は、ことばを学ぶ者だけでなく、教育的資源が限られている地域にとっても朗報となる。こうして、本研究の目的は、大きな(意味・価値の)潜在性を秘めた素材の対話への組み込み方と、その営為が個人に与える影響の解明が主軸となる。一人一人のことばの力の向上には、周囲の人々とのかわり=対話が必要で、かつ、学びの状況の活性化にも対話が不可欠であることを明らかにする。

具体的な目的は以下の3点である。

- (1) 螺旋的循環に関するカリキュラム理論の確立
- (2) 多言語環境中でのアクションリサーチ等を通じた、理論の実効性、手法の有効性、学習環境と学習者との関係性の実証
- (3) 相互交流と環境良質化の手法を学ぶ新教科「対話」の創設

3. 研究の方法

本研究の目的にしたがって、(ア)カリキュラム理論の確立、(イ)調査を通しての実証、(ウ)教科「対話」の創設を順次行う。各段階に準拠して、平成23年度は文献調査・事例視察・調査対象教室開拓、平成24年度から25年度にかけて、実証研究着手・理論の検証と精練・成果還元事業の設計、最終年度の平成26年度は理論完成・現場での検証・周知活動・カリキュラムモデル提案と実施要領策定および実際の授業開講・研究総括と評価、を遂行していく。方法論として、エスノメソドロジーを主とする質的研究法、およびその発展形である「研究過程と同期する成果還元法」を採用し、教育現場への肯定的な意味づけと現場独自の主体的実践を促進する。

教育現場における実証研究においては、当該現場との高い協働関係の維持が円滑な研究遂行上の鍵になることを念頭に、現場に負担をかけないこと、現場のニーズを補完すること、現場を肯定的に意味づけること、という3点を基本方針にして計画を進めた。

- (1) 現場に負担をかけない=生態学的妥当性を充足した調査の実施

対話的活動を主目的とする教室の創設、授業記録と分析、分析の即時活動化を繰り返す「アクションリサーチ」

現状把握を趣旨として、関係者に聞き取りを行い、同時に顕在化しにくい知見を発掘していく「インタビュー」

アクションリサーチとインタビューを発展させ、将来的な対応策について意見交換等を行う「ワークショップ」

- (2) 現場のニーズを補完する=研究過程と同期する成果還元

協力校の授業計画を最大限に活かしつつ教材提供・教室運営を行う「教室・授業の開講と自律への助力」

学習者のコミュニケーション力を伸ばす方法等の提案「ことばの力の向上を図

る支援」

学習過程重視の形成的評価を試み、学習者の変容性を柔軟に考慮した評価を行う「多角的な評価方法の提案」

学校外には伝わりにくい高度な実践知を発掘し優れた取り組みを広く周知する「意見の代弁と教育実践の意味づけ」

- (3) 現場を肯定的に意味づける = 現場重視の
カリキュラム評価基準と理論の完成

4. 研究成果

本研究の成果は多岐に渡るが、最大の評価点が本研究着手時に打ち立てた3つの目的を完遂したところにある。

螺旋的循環に関するカリキュラム理論とは、学習者（環境構成員）同士の対話が学習環境をつくり、環境づくりへの各人の尽力が環境を良質化し、環境の良質化が個人の学習の進展に寄与し、個人の学習の進展が更なる対話（= 相互行為）を可能にする、という観点である。これは、学習を社会的実践と定義づける正統的周辺参加論を踏襲するものでもあり、社会（教室）への関わりが個別の学びの促進に寄与するだけでなく、個別の学びが教室そのものの構築に大きな影響を与えることを説明する。さらに、教室と学習者の影響関係のみならず、学習そのもの、殊に本研究においては言語学習そのものが、時に個人的事象として、また時に共同体的事象として顕現することを示唆するものでもある。ここからも、B. ロゴフ(1995)の言う学習の3形態（「参加型専有」「ガイドされた参加」「体系としての徒弟制」）は、それぞれを独立した営為とみなしてはならない、つまり言語教育場面の性質として一括した捉え方をすべきことが示される。簡潔に当該カリキュラム理論を総括するならば、教室全体の学習は同時に学習者一人一人の学びでもあるということである。

上述した理論の妥当性は、本研究の中で実施した教室での検証過程でも明らかになっている。

下記論文 で言及しているように、言語支援者（指導者）の支援行為のプロセスが当該学習者に対する理解のプロセスと一致し、学習者自身の力が向上に進む（多彩な表現の表出につながる）プロセスとも平行しているのは、まさに個人的な変容過程が対人的・共同体的なものでもあることを示している。

また、実践現場における検証過程を経て改めて提唱することとなった概念が「対話」である。端的に二者間の音声言語による話し合いとみなすだけでは、単なる教育的手段の範疇を越えることができず、その有用性も解明できない。本研究の実績が示すように、個人的・対人的・共同体的営為を創出し、学習行為そのものであるという捉え方が可能となって、はじめて対話の意義が明瞭になる。下記論文 での報告は、将来的に対話を教科として整備していく際の具体的な方法と内容を

を解明したものである。中でも、教科学習のために対話を行うのではなく対話的な活動が学習（事項）と考え授業を構築している様相は、「学習」と「活動」を内容と方法の分断として取り扱わないことの重要性、活動こそを学習としていくことの重要性を主張する根拠となった。

下に、検証を実施した（実証研究の協力をいただいた）学校・教室を示す（名称等は匿名・調査実施期順）。研究成果はすべて各学校・教室に還元した（上述の「研究過程と同期する成果還元」を実施）。

- ・ S 小学校（国際学級）・東京都渋谷区
- ・ T 高等学校（外国人クラス）・東京都北区
- ・ U 小学校（一般学級）・静岡市
- ・ 日本語支援教室・掛川市
- ・ P 外国人学校・浜松市
- ・ E 特別支援学校・サンパウロ市（ブラジル）
- ・ J 公立学校・サンパウロ市（ブラジル）
- ・ M 公立学校・サンパウロ市（ブラジル）
- ・ B 公立学校・サンパウロ市（ブラジル）
- ・ A 外国人学校・浜松市
- ・ T 中学校（個人指導）・静岡市
- ・ D 小学校・バンドン市（インドネシア）

三点目の目的である教科の創設であるが、厳密な意味での（法律上の）教科化には、研究活動を越える極めて広範囲な社会的・政治的・経済的働きかけと世論の醸成を前提とするところから、多くの課題が残された。しかしながら、学校教育の場面においては、昨今、教科横断的・合科的授業の必要性が益々高まっており、その意味でも本研究が到達した上述の成果には、良質な質的効果が伴うこととなった。特に、大学をはじめとする高等教育・研究機関において、対話を学習とするカリキュラムの構築および実践化を可能にした点は、特筆できる。実際にも、本研究員の担当科目（留学生対象の日本語学習・一般学生対象の専門科目等）において「対話」を導入し、学生教育に一定の成果を挙げている。

最後に、本研究の影響であるが、最終年度に実施した各種周知活動の効果もあって、理念と観点が徐々に知られはじめている。動的・可変的・主体的方針としてのカリキュラム概念は、教員等の運用者の専門性に左右されない汎用性をもっており、教員に即自的な参照性（参考のしやすさ）を提供している。また、本研究で採用した研究過程と同期する成果還元という方法も、生態学的妥当性（当該事象で何が起きているかをできる限りそのままの状態に記述する正確さ）を満たす高度な研究方法としてこれからの実践研究には欠かせないものとなるだろう。さらに、対話の概念を明確に理論化した結果、総合的な学習の時間・国際理解教育・言語活動等の今日的課題を取り上げる実践に対して、適切な指針を示すことになった。広い文脈を取り上げるならば、「支援」「相互行為」「媒介」といったものに立脚する成果であったため、

現在世界的に研究が進む多文化共生社会への理解と参画に結びつき、教育学・心理学・社会学・言語学などの関連分野を横断しかつ有機的に関連づけた点において、既存分野の発展に貢献した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計6件)

宇都宮 裕章、色川 卓男、益川 弘如、池田 恵子「教員養成における学習開発学の創造」『静岡大学教育実践総合センター紀要』査読有、vol.24、2015、pp.1-14、

宇都宮 裕章「ダブルリミテッド言説に対する批判的論考」『静岡大学教育学部研究報告』(教科教育学篇)』査読有、vol.45、2014、pp.1-13
<http://ir.lib.shizuoka.ac.jp/>

宇都宮 裕章「文法現象の教育言語学的考察 数量詞と格助詞を再考する」『静岡大学教育学部研究報告(人文・社会・自然科学篇)』査読有、vol.64、2014、pp.1-13、
<http://ir.lib.shizuoka.ac.jp/>

宇都宮 裕章「越境社会の学校教育における言語教育環境の構築」『静岡大学教育学部研究報告(教科教育学篇)』査読有、vol.44、2013、pp.1-14、
<http://ir.lib.shizuoka.ac.jp/>

宇都宮 裕章「教育的貢献を踏まえた言語観へ 生態学的言語論の提案」『静岡大学教育学部研究報告(人文・社会・自然科学篇)』査読有、vol.63、2013、pp.1-14、
<http://ir.lib.shizuoka.ac.jp/>

宇都宮 裕章「対話的教育実践の意義 サンパウロ市立学校での言語教育に学ぶ」『静岡大学教育実践総合センター紀要』査読有、vol.21、2013、pp.1-10、
<http://ir.lib.shizuoka.ac.jp/>

〔学会発表〕(計3件)

宇都宮 裕章、対話でみがくことばの力 Brushing Up Your Language Through Dialogue、インドネシア教育大学言語芸術教育学部、2015.3.5、インドネシア教育大学 FPBS 棟 3F 大講義室(招待講演)

宇都宮 裕章、言語活動による教育環境の醸成 グローバル化時代の教員の資質について、INTERNATIONAL CONFERENCE ON TEACHER EDUCATION、2013.12.23、インドネシア教育大学(国際シンポジウム)

宇都宮 裕章、グローバル化する学校での教育環境を醸成する教員とは 生きる力を育てる環境としての言語活動の中で、

2013.10.5、平成 25 年度日本教育大学協会研究集会、北海道札幌市(北海道教育大学主催・担当)

〔図書〕(計1件)

宇都宮 裕章『新ことば教育論 いのち・きもち・だいちの考察』風間書房、2011、262

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.ipc.shizuoka.ac.jp/~eahutsu/>

6. 研究組織

(1)研究代表者

宇都宮 裕章 (UTSUNOMIYA, Hiroaki)
静岡大学大学院教育学領域・教授
研究者番号：30276191

(2)研究分担者

(3)連携研究者

ヤマモト ルシア エミコ (YAMAMOTO, Lucia Emiko)
静岡大学大学院教育学領域・准教授
研究者番号：20451495

菅野 文彦 (SUGANO, Fumihiko)

静岡大学大学院教育学領域・教授
研究者番号：30216288